
『浮かぶ国』 - 認定者の資格 -

ともにー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『浮かぶ国』 - 認定者の資格 -

【Nコード】

N5028F

【作者名】

ともにー

【あらすじ】

『浮かぶ国』と呼ばれる、浮遊する大陸の一国ロツシュで領主令嬢の専属教師を務めるファン・ナバーロ。平穏な生活を望む彼だが、彼の知らないところで、運命は大きく狂っていく……。認定者と呼ばれる強化された仲間達を通して、生きていく事の資格について思い悩む主人公を描いた異世界ファンタジー。***筆者未熟のため、頻繁に修正・加筆があるかと思いますがご了承下さい***

序（前書き）

特に「序」は、PDFよりも縦書き表示の方が読みやすいかと思
います。

序

資格 資格「しかく」とは、ある行為を行うことを権限者から許された地位をいう。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

序

薄赤い明けの空を覆い尽くして、広漠な大陸が浮かんでいる。
遙か上空から見れば、大きな円卓が空を流離っているようだ。

大陸の周りには、隙間が無い位に大小多数の岩の塊が漂っている。
周囲を漂う岩の塊は、まるで空を彷徨う島のように見えた。

浮かんでいる大陸の地表から、幾つもの蒼い光の筋が、漂う島に向かって昇っていく。

蒼い光は島にぶつかり、島を捕らえたまま地表に向かって降りてゆく。

島が大陸に向けて、ゆるやかに、ゆっくりと落ちてゆく。

『浮かぶ国』が大地を離れて数百年、日々繰り返されてきた光景である。

しかし、大陸が大地を飛び立った^{わけ}真実を知る者は少ない。

chapter 1 - 1 森

数百年前から育てられた高樹^{たかぎ}が立ち並ぶ領主の森。

千枝^{ちえ}に別れた緑の天蓋^{てんがい}は薄い暁光^{あけみくつ}を遮り、森は薄暗い。昨日の夜に降^ふらされた雨により、森はじつとりと湿気を帯びていた。初夏とはいえ、鳥肌が立つほど冷たい空気が森の中に満ちている。森は全ての音を吸い込んだように、物音一つ発しない。

その中をねつとりと、白い霧が樹々に絡^{から}みつくように広がっていく。

爆轟！

唐突に、樹木を揺さぶる炸裂音^{さくれつおん}が森に響き渡り、霧の中から一人の男が跳びだして来た。

男 大人の男というにはやや若い、おそらく年の頃は二十二、三才だろう。

すらりと伸びた長身に、すっきりと短い黒髪、幼さを残した甘い横顔、物腰の柔らかさを感じさせる目許^{めもと}、だが美丈夫というよりは頼りない優男という印象だ。

男はふかふかな絨毯^{じゅうたん}に似た苔^{こけ}の上を駆け抜けていく。

黒い防弾防護服に身を包み、腕に持つ一メートルを超える針のように細くて尖った刀身に、短い砲身の擲弾発射機^{グレネードランチャー}が一体化された鎧刺^{エーストック}し剣の禍々^{まがまが}（まがまが）しい外見が、持ち主のおっとりした印象とは対照的だ。

霧の向こうを見通すように男は鋭い視線を周囲に配りながら、木の影から陰へと体を滑らせて行く。だが、俊敏な動きとは裏腹に、男の妙に強ばる肩の動きからは隠しきれない焦りを見取ることができる。

身を潜^{ひそ}める木を変えることが十数回を数えた頃、一際大きな木の

陰に入り体の動きを留める。

そのまま男は巨木の根元に腰を下ろし、地面に手をついて、胸を何度も大きく上下させる。赤みが差した頬より流れ落ちる汗からは、蓄積した疲労の多さを感じた。

（さっきの攻撃をかわしてから三分つてとこか。そろそろ次の攻撃がくるな……）

腰に装着した弾丸入れに右手を伸し、蒼い光沢を放つ薬莢を取り出した。男は自分を落ち着かせるように手のひらで弾を転がして弄ぶ。

（ふう、蒼石弾は残り一発か……、でもこいつに賭けるしかないんだよな……）

蒼石　蒼石は独特の蒼い光を発する、遺失技術により生みだされた物質だ。

蒼石は無機、有機質に関わらず全ての物質に精製可能である。雨も自然には降らず、地下資源が枯渇している『浮かぶ国』において人々の生活を支えているのは蒼石だ。ほぼ全ての食料、工業原材料は蒼石から精製されている。

また、蒼石を爆発物として使用する銃弾は強力な威力を誇っている。だが気軽に撃てるほど安価ではないため、普通は切り札として少数を所持するのみだ。

男は祈るように見つめながら、慎重な手付きで薬莢を発射機に込める。

そして深く、ゆっくりと、息を吸い込んだ。

（よし、勝負だ！　こっちから誘い出してやる！）

迷いを断ち切るように拳を力強く握り締め、勢いよく立ち上がる。濡れた苔によるめきながらも、見えぬ敵に逆襲すべく移動を再開する。

（　　走れ走れ走れ！　）

男はあたかも戦慄の絶対者に命令されているように脚の限界を超えて、草むらに燃え広がる火よりも早く走り出す。

（今度はどつちから来る？）

（右か？ 左か？）

（まさか前から？）

男の視線は素早く動きまわり、敵の居場所を探っていく。

駆け出して二百メートル近くに達したとき、まとわりつく霧を切り裂きながら一陣の風が頭上に流れ込んだ。

彼は風の流れに誘われるままに顔を上げる。

その視線の先、梢のやや下の辺り

（ 見つけた！ ）

刹那、頭から爪先までが痺れるような殺意が男に突き刺さる。だが怯むことなく筒先を上げ、素早く照準を合わせた。そして迷うことなく引き金を引く。

「吹っ飛べ！」

必中を命じるように大きく叫んだ。

筒先から白い煙を引きながら飛び出していった弾丸が、巨木を直撃し微塵に爆ぜ裂く。

だが爆発が起る寸前、しなやかな曲線に恵まれた肢体が男の頭上を舞い抜けた。

（ 外した！ ）

と同時に蒼石の蒼い輝きが男に向かって伸びていく。男は発射の反動に体勢を崩しながらも、精一杯の力で身をひるがえす。

直後、わき腹をかすめるように蒼い光が通り過ぎ、背後の苔に覆われた大地が抉られ、緑と茶の破片を周囲に撒き散らし容赦無く男の体を叩いていく。

男を飛び越えて背後に降り立った女は、首筋で綺麗に揃えられた血よりも濃い深紅の髪、身にまとう金属で補強された黒い防弾防護服、自分の身長と変らない柄に斧を取り付けた蒼い半月斧槍、三つの色の対比が鮮麗であった。

肩越しに男へ振り向けた顔には、大人の女性として成熟した優美な顔立ちの中に、やんちゃな少女のあどけなさと、墮落した天使の

艶めかしさの二つの表情を両立させていた。なま

（逃げなきゃ）

一秒、一瞬を惜しんで走り出す。

男を追いかけて、一発、二発と蒼い光が追い越していく。思わず振り向いた男の視界の真ん中を、常人には真似できない速さで距離を縮めてくる、殺意を纏った紅と黒と蒼の美しい修羅がいた。

「霸つ！」

女は魂魄の気合いのもとに跳躍を行い、一気に間合いを詰める。こんはく

そして舞うような麗しい旋回で、半月斧槍を水平になぎ払う。ちやうやく

男は鎧刺し剣を持ち上げ必死に躲そうとする。エストック

金属のぶつかり合う、甲高い音が森の中に響き渡る。

「くっ！」

衝撃の大きさに男の顔が歪む。

遠心力の乗った槍の穂先を男は捌ききれず、一気に鏑元まで押し込まれる。そのまま女は強引に半月斧槍を振り抜き、男の体が宙に浮く。バルディッシュ

一瞬、女の締まった桜色の口元がゆるみ、緋色の目がにやりと笑う。

「王手積み」チェックメイト

「えっ？」

吹き飛ばされた体が地面に落ちた瞬間、直径二メートル程の穴が生まれた。

（落とし穴！？）トラップ

足掻く間もなく体は穴の中に吸い込まれ、必死に伸ばされた手は空を切る。あが

男が穴に消えると同時に、皮袋が地面に落とされるような鈍い音と水面をたたく浅い水音が聞こえた。

「ぐっ」

底に溜まった泥水が落下の衝撃を弱めたが、男の口から苦痛の音が漏れでる。も

（くそ！ 今日も完敗だ……）

泥水により急速に体の熱が冷やされていくと、嘘のように高揚感
は去り、変わりに冷静さが取り戻されていく。

（大体、僕みたいな教師が、戦闘専門の認定者に勝てるわけがない
んだよな……）

認定者は、生身で蒼石^{セナン}を使えるように体を強化され、絶大な力を
得た者の総称^{ソウセイ}である。

通常は精製して使用する蒼石を、認定者はそのまま体内に摂取す
ることが出来る。そして、体の中に蓄積^{ちくせき}された蒼石^{セナン}を消費する事で、
認定者は一時的に常人の数倍以上の筋力を発揮することが可能であ
る。

また、用途に応じた様々な蒼石装置を併用すれば物理常識を捻^ね
曲げる現象　光弾の射出、分子結合の強制解除、肉体の再生力の
促進など　を起こす事が可能だ。

圧倒的な戦闘力を持つ認定者に対する軍隊の戦術概念は、認定者
一人に対し複数で対応するのが常識であり、一対一の状況になった
時点で勝負はついている。したがって、男の感想は至ってまっとう
なものであった。

地上では赤毛の女が、武器の傷を確かめるように軽く斜めに槍を
一振りし、流れる手付きで武器を十分の一程に凝集して腰に巻かれ
たベルトに吊した。

一連の動作を終えると、女の表情が一気に緩^{ゆる}んだ。

女は嬉^{うれ}しくて、楽しくて、たまらないと笑顔を隠さずに軽快な足
取りで穴に近づいていく。

そして、穴の中を覗^{のぞ}き込みながら、澄^すんだ声でとどめを刺す。

「いい格好だわね、ファン！　お嬢様が無^む様なこの姿を御覧になつ
たら、先生としての威厳が落ちて成績下がっちゃうかもよ？　そした
らロツシュの国を追い出すされちゃうかも？」

穴の中で頭から泥水をかぶっている男　ファン・ナバーロは口
ツシュ領主の令嬢を教える教師だった。

穴の底からは引きつった怒鳴り声が発せられる。

「グエンさん！ 弱い者を守るべき立場の貴方が、弱い者虐めをして喜んでるほうが、僕は心配です！」

裏返しにされて動けない陸亀のような体勢からファンは精一杯の抗議を試みる。

穴の縁に立つて腰に手を当て、さも可笑し^{おか}そうに見下ろしている女　グエンダ・カウルはロツシュの領主一家の護衛を担当する認定者である。

二人が仕えるロツシュは君主制国家『浮かぶ国』の東部に位置する国である。

『浮かぶ国』は空に浮かぶ円形な大陸である。その大きさは直径約一千五百キロメートル、大地の厚みが平均四百メートルにも及ぶ。

その歴史はおよそ五百年前に蒼石の力を使って大地から飛び立った時に始まる。

当初、『浮かぶ国』は滅亡の危機にあった。

大陸が地上を離れたことで気象は激変する。殆ど雨は降らなくなり、森や川は消失し、野生生物はほぼ絶滅し、多くの街は放棄され、人口は激減してしまった。

『浮かぶ国』がなんとか混乱を乗り切り、落着きを見せた始めた約四百年前、国土の復興を目的に形成された最古の領国の一つがロツシュであった。またロツシュは、自然のままでは大きな樹木が育ちにくい『浮かぶ国』の中で、自然木材を材料とした高級木工品の生産で有名だ。二人が居る森も、ロツシュ領主の居城を中心にして何代にも渡って造られてきた人工の森なのだ。

そのロツシュの城で教師の仕事を始めて一年ほどのファンだが、多くの使用人が働く城の中でも知らぬ者はいない有名人であった。それは今年十八歳になる領主令嬢が初々しい恋心^{いた}をファンに抱いていたからであった。ファンも、男として可憐^{かれん}な女の子に思いを寄せられている事に悪い気はしないが、大国ロツシュのお姫様と結ばれると思うほど子供でもなかった。

また加えて、領主嫡男^{ちやくなん}が整った顔立ちのグエンダに対して露骨な下心を持って雇用したのも城では有名な話であった。だがファンとは違い、グエンダが嫡男^{れつぎゆう}の劣情^{れつじやう}を好意的に受け取っているとはとても言えなかった。

「まあまあ、怒らない怒らない」

「……」

平然としたグエンダの態度に、ファンは悔しさのあまり言葉が出でこない。

お構いなしにグエンダは訓練の率直な感想を告げる。

「射撃は大分と上手^{うま}くなつたわね。最後は少し、ひやっとさせられたわ。でも他はダメダメだけどね」

そして、すりりとした手を穴の中へ差し出した。

この一年近くの間、グエンダは訓練と称して嫌がるファンを無理矢理に引つ張り出して今朝のような実弾訓練を行うことが多々あった。そのお陰で、嫌々ながらも認定者と模擬戦闘を繰り返したファンの力はかなり上達していた。

自力では抜け出せないファンは差し出された手をひたたくるようにつかみ取る。

「それで褒^ほめるてるつもりですか？」

惨憺たる結果に、成長を実感できないファンは素直に喜べない。

グエンダは細身ながらも認定者を感じさせる強靱な力で、ファンを軽々と穴から引きずり揚げた。

引き上げられたファンは、嫌がらせのように何度も服装の乱れを直した。

「ところでグエンさん大丈夫ですか？ 勝手に城の備品を使って大切な樹を何本も駄目にしちゃって……、また護衛部の隊長に怒られますよ？」

怒りが収まらないファンは口を尖らせて確認する。

グエンダの上官である食事の度に自慢の口ひげを整える初老の隊長は、怖いもの知らずのグエンダが苦手とする数少ない人間の一人

だ。

「あー、この前にね、『お嬢様の御側にいるファン・ナバーロを鍛えることは、お嬢様の安全にも効果的であると、わたくしグエンダ・カウルは具申ぐしんするものであります』って言ったら、あのおっさん『それならば遠慮は無用だ、存分にやってくれたまえ』って言ってたわよ」

おどけた調子で自慢の口ひげを撫なでるしぐさを真似て、平然と言ったのけた。

「それで最近、訓練イジメが増えたんですね……」

ファンは聞きたくもない真実に体から力が抜けて、腰から地面に座り込んだ。

「そういうことよ、理解できた？」

グエンダは、劇の筋書きをばらすように、意地悪く得意げに笑った。

ファンとグエンダ、教師と認定者、愚直と奔放ほんほうという違和感を感じる組み合わせの二人である。しかし、ほとんどの城の使用人達が祖父の代以前からロッシユ家に仕えている中で、短期の契約によって城で働くファンとグエンダは、数少ない部外者よそものだ。しかも、純粹と不純の違いはあるが、仕える主の想いあるじのお陰で他の使用人から煙たがられる二人であった。

（まったく……、根は悪い人ではないんだけどな……）

その中でグエンダは四つ年下のファンを弟のように思い、世話を焼いて可愛がっていた。彼女が「グエン」と愛称で呼ぶのを許しているのも城ではファンだけである。色々と理由をつけては引きずり回し、上からの目線で物をゆう困った存在だが、その明るい性格には日頃から助けられているファンであった。

ファンは、まだ肩を震わせながら笑っているグエンダを、呆あきれたように見上げながら言う。

「でも、あんまり派手に」

と、そのとき上空をつんざく爆音が森に響き渡りファンの声を掻か

き消した。

ずいぶんと明るくなった東の空を、衝撃波で森を揺らしながら、何かが飛び去っていくのがはっきりと感じられる。

追いかけるように二人の視線が重なり合い、梢の向こうを仰ぎ見た。

「今の音……、もしかして空中浮遊車ランドホバーですか？」

体を起こしながら、初めて聞く音にファンが自信なさそうに質問した。

「間違いないわね。それにしても、ご領主様はずいぶんとお早いお帰りよね」

「……確か、予定では今週末まで皇都ミッドガルで皇王家の方と謁見されると聞いていましたが……。しかも、この様な早朝にお帰りになるなんて……」

ファンは首を傾げながら疑問を口にした。

皇王家は大陸が空に飛び立って以来、『浮かぶ国』の全土に君臨する支配者である。

蒼石セナンを含む遺失技術いしつを独占している皇王家は『浮かぶ国』の中心地、皇都から支配を行っている。国土の大部分は臣下の貴族に領地として分け与えていた。各領地には高度な自治が認められている一方で、厳しい義務が課せられていた。民衆から見れば同じ支配層の住人だが、高位の貴族になればなるほど皇王家との力の差を痛感している

そして空中浮遊車ランドホバーに代表される、蒼石セナンを使った機械の運用には皇王家の許可と多額の費用が必要であり、日常での使用は限定される。その点を考えれば、乗客は皇都に出かけている、ロッシユ現領主のロサーノ・ドン・ロッシユ可能性が非常に高かった。

何事かと心配そうに眉をひそめるファンだが、グエンダの気になる点は違っていた。

「まったく、空中浮遊車ランドホバー？ 雨はこんなに降らすし。ほんと、ご領主様はちよつと贅沢し過ぎじゃない？」

グエンダは地面を蹴り飛ばし、きつい調子で空の向こうに食ってかかる。

万能に思われがちな認定者だが、一つ大きな問題点がある。

それは認定者の力を維持するために多量の蒼石が必要な点だ。

認定者が本来の能力を発揮するためには、日頃から高額な蒼石^{セナン}錠剤を摂取し、蒼石^{セナン}を体に蓄積しておく必要があるからだ。軍では費用削減のために一部の人員を除き、貴族間の紛争などの非常時に必要な人数を臨時雇用するのが一般的だった。公的機関に所属しない在野の認定者の多くは武器・装具と同じく、錠剤の費用にも頭を痛めている。

グエンダもロッシユ家に仕える今はともかく、認定者になって日が浅いころは日々のやり繰りにも苦勞してきた。そのため、ロッシユ家の無駄と思った贅沢には批判的であった。

（グエンさんの気持ちもわからなくはないけど……）

ファンはそんなグエンダに目を向けながら、複雑な表情を浮かべた。

ランドホバー

確かに皇王家から空中浮遊車を借り受けることは、ロッシユの基準で考えても安くない費用が発生する。事実、貴族の矜持^{プライド}のために城の周囲に広がる広大な森を維持し、継続的に蒼石^{セナン}を使って雨を降らしているロッシユ家は、その莫大な費用のために低迷していた時期がある。

（でも、ロッシユは今順調なんだから少しくらい贅沢しても問題ないと思うんだけどな……）

娘には甘いと言われるロサーノだが、近年のロッシユの状況は彼の指導のもとで大きく変わっていた。

まだ

まだ怒りが収まらないグエンダを、宥めるようにファンは言う。

「いいですか？ ロサーノ様はしっかりと統治されてますよ。それに今年も落ちた島が多かったんで、昨年と比べても我が国ロッシユへの食料供給量は五%増、平均市場価格は九%減。工業物資に関しても」

雨も自然には降らず、地下資源が枯渇している『浮かぶ国』において人々の生活を支えているのは蒼石だ。武器だけでなく、ほぼ全ての食料、工業原材料は蒼石から精製されている。

その蒼石は地上に落ちた島から採取される。

島 『浮かぶ国』では周囲を漂う大小様々な岩塊を島と呼ぶ。

島の元の姿は『浮かぶ国』が大地に在った時、周囲に存在していた貴族の屋敷や研究施設である。それが『浮かぶ国』が周囲の土地を粉々に割って大地を離れる際に、建物に存在した蒼石設備を核として岩盤ごと大陸に引きずられて一緒に空を漂う事になったのだ。

島は小さい物で周囲百メートル、最大級では周囲数十キロメートルを超えるものもある。

島は例外なく蒼石を貯蔵し、大きさに比例して貯蔵されている蒼石の量は増大する。

落ちた島から回収された蒼石は一度国に集められ、税として皇王家へ上納されたり、物資の生産に使われる。つまり、落下する島の数や大きさは蒼石の採取量に直接影響し、そのまま国の景気動向をも左右するのだ。

その為、島の取り扱いに関しては厳格な法が皇王家により制定されている。貴族同士の争いごとには無関心な皇王家も、島や蒼石に關係する違反には厳しく対応を行い、重大な罪を犯した貴族が取り潰されたこともあった。

何度も練習した報告書を読み上げる官僚のような内容に、グエンダはうんざりと、乱暴に手を振りかざしてファンの言葉を妨げた。

「はいはい、管理局のお役人みたいな話は結構よ」

「僕は一年足らずで、そのお役人になるんですけどね！」

ファンは得意げにそう言と、十歳の男の子のよう無邪気に胸を張った。

諸島管理局、通称「管理局」。島の牽引を許された領国にのみ存在する機関である。

その名の通り蒼石の採取源である島と、蒼石採取量と密接に連携

する国の経済の二つを管理する機関だ。

全ての島は常に各国の諸島管理局により観測されており、皇王家の定める法に基づいて処理される。島は領地内で一定の高度を切る
と地表に蒼石セナンの力を使って牽引される。地上に落とされた島は入札により決定した認定者達が敵対的存在を掃討そうとうし、安全が確保されると管理局により残された蒼石セナンが採取される仕組みである。

（そうだよ、後一年！ 一年で推薦が貰えるんだ……）

ずたずたにされた自尊心を取戻すかのようにファンは拳を握りしめた。

管理局には、その国の才能に溢れた優秀な人材が集められており、その席を希望する者は多い。そのため、管理局で働くには優秀であること以外の要素 有力者の推薦も時には必要であった。ミリアム専属の講師契約の中には、不備なく二年間の契約終了後にロツシユとして管理局へ推薦するという項目があった。

輝かしい未来を想像して目尻を下げるファンを見て、グエンダは新しい悪戯いたずらを思いついた子供みたいな笑みを浮かべ、彼の真正面に回り込む。

「グエンさん？」

不安を感じて身構えるファンの首に手を回し、認定者の力で強引に引き寄せる。

それから背伸びをし、耳元にとがった唇をよせた。

「ねえ、ほんとに役人になっちゃうのお？」

吐息のかかる至近距離で、わざとひそめた声で耳元に囁ささやいた。

「えっ？」

回された手を振りほどき、一歩後ずさったファンは、思ったよりも間近にある誘うように婀娜あだっぽい唇に戸惑い、思わず視線を顔ごとそらした。

笑いを噛み殺して目を見つめながら言う。

「ふふっ、これ位で顔を赤くするなんて可愛いわねー」

「っ」

ファンも顔が火照っているのが自分でも解るだけになにも言い返せない。

意地悪く肩を震わせながら笑いをこらえてグエンダはさらに続ける。

「やれやれ、相変わらず女の扱いが駄目よね。そんなのであと一年もお嬢様をお守りできる？」

「認定者なんか嫌いだ……」

「管理局の役人なんて、ろくでもないわよ」

目尻に涙を浮かべながら、ぼそりと呟く（つぶや）ファンに、グエンダは涼しい顔で即座に言い返した。

（やっぱり僕には認定者の人がよく理解できないよ……）

『浮かぶ国』に無くてはならない認定者だが、その多くは賭け事を楽しむかのように、派手に稼ぎ、派手に使い、そして若くして命を落とす。実際、認定者の生き方は羨望せんぼうの眼差しまなざしで見られると共に必要以上に関わりたくない人種として、一般の民衆から見られているのも確かであった。

ファンは四年前に事故で両親を亡くしている。その経験から彼は安定した生活を強く望んでいた。ファンにしてみれば認定者は短期間で楽に稼ぎたい愚か者に過ぎなかった。

それでも一矢報いようと質問を投げかけた。

「『天に浮かぶ月は手に届かぬが故に美しく、地に落ちた島は手に入るが故に貴重である』って言葉を知らないんですか？」

「なによそれ？」

きよとんとするグエンダにお構いなしにファンは続ける。

「古くからロツシュに伝わる戒めの言葉です。『美しくても手に入らないものに憧れるよりも、格好悪くても身近にあるものが生きていく上では大切である』、人生や恋を語る際によく使われる言葉です。簡単に言えば、『夢ばかり見てないで、現実を見る』って意味です。グエンさんにはぴったりの言葉ですね！」

ふむふむと腕を組みながらファンの故事の解説を聞いていたグエ

ンダだが、何かを思いついたように小気味よく手を打った。

「えーと……月がミリアムお嬢様ってことよね、それなら島は……

……あたし!？」

「ち、違います!」

「じゃあ、誰なのよ？ 例の幼なじみ?」

にひひと下品な笑みを浮かべるグエンダは、まだまだファンをからかい足りないようだ。

(エレナか……。もう二ヶ月も会ってないよなおさななじ……)

頭の中に故郷で母親と二人で宿屋を営む幼馴染みの姿が浮ぶ。

最後に会ったとき、肩を超える豊かな金髪を一つに束ね、生まれつきの気の強さを示す切れ長の瞳に涙を浮かべて、会えなくて寂しいと文句を言っていた、彼女の姿が脳裏を掠かすめる。

苦笑いと溜め息を飲み込み、恋人と断言できない幼馴染みの姿を振り払うかのように頭を左右に振り、話を変える。

「そんなことより、そろそろ城に戻ったほうがよくありませんか？ ロサーノ様のご帰還の理由も気になりますし、何よりお腹が空きましたよ」

ファンは小腹の辺りをさすりながら片目をつぶり、無理におどけて見せた。

「了解! ラジャ おしゃべりは帰りの馬の上でもできるしね。さあ、片付けるから鎧刺しエストック剣返して。壊してないでしょうね?」

「壊してません!」

グエンダはファンから剣を受け取り、確かめるように軽く一振りして凝集すると、腰のベルトに差し込んだ。

「さあ、城まで競争よ! 負けたら」

「もう、勘弁してください……」

いつの間にかすっかり霧が晴れて明るくなった中、馬を繋いである森のはずれへと急ぐ二人であった。

chapter 1-1 森（後書き）

初めて書いてる小説ですので、ペースが全く解りません……
誤字脱字、おかしい表現等がありましたら、ご指摘を頂けると嬉しいです。

chapter 1 - 2 帰郷

ファンは馬車のがたつく窓を力一杯開けながら、気になっている疑問を口にした。

「どうして馬車こしにいるんですか、グエンさん？」

ロッシュの国都ガリシアは昼下がりの陽光に包まれている。

街の擦り切れた石畳の上を忙しげに荷馬車が行き交かい、道端みちばたで店を広げる商売人達の物売りの声が溢あふれかえっている。昔ながらの赤茶色の煉瓦れんがで造られた古い建物と、蒼石セナンから精製された建築資材で造られた新しい建物が混在する街に、気持ちいい初夏の風が通りを吹き抜けていく。

自然には滅多めったに雨が降らない「浮かぶ国」だが、領主の城に隣接するガリシア周辺は蒼石セナンを使つて天候を管理されている。そのため本格的に夏の始まらないこの時期は過ごしやすい。

整った顔に掛かる深紅の髪をかき上げながらグエンダは眉ひそを顰ひそめた。

（男の癖にごちゃごちゃと、うるさいわね……）

平然とファンの向かいの席に陣取っているグエンダは、いかにもやれやれという感じで肩をすくめると、はいと乗車前に購入しておいた紅茶の容器をファンに手渡す。

「こんな美人が退屈な旅に同行してあげるっていうのにつれないわよね」

荷物を積み終わり、乗合馬車は乗客でこった返す駅舎を滑り出した。

馬車を牽く馬の蹄ひづめの音が煉瓦の壁と白い石畳との間で跳ね返り、心地よい残響を生んでいる。

蒼石セナンによる輸送機関が制限されている『浮かぶ国』において、民衆の主な交通手段は馬車だ。主要な町から町へは毎日数回の路線便

が運行されている。

フアンファンの故郷、国境沿いの町ナバラに向かう、色褪あせた馬車に乗る乗客は疎まばらである。

二人席が向かい合わせになる四人用の前部座席を、防護服を脱ぎゆつたりとした上着の長い丈から太股が覗くグエндаと、見栄えのしない地味な私服に着替えたフアンファンの二人だけで占領している。背もたれで仕切られただけで、同じ造りの後部席には中年の夫婦らしい男女二人が並んで座っていた。

フアンは礼を言つて受け取り一口含んで喉を潤してから、全く解消されていない疑問を再び口にする。

「てつきり隣の馬車に乗ると思つてたのに……。確かに帰る方角は同じですよ。でも、グエんさんの故郷に帰るにはガリシアから直接行かれた方が……。ナバラには観光するようなものは無いですよ？」

相手の意図が掴めなくてフアンは、言葉に力が無く語尾も途切れがちだ。

（ナバラに何も無いのは知ってるわよ）

グエндаは心の中にてりと笑つた。

ナバラは、粘土で作る日干し煉瓦と認定者集団グレミオが主な産業の地味な町だ。

粘土は数少ない『浮かぶ国』に残された資源で、粘土の採取でナバラは有名であつた。しかし粘土で作る日干し煉瓦は安価だが見た目が悪く、近年好景気のロッシュでは高価でも見た目の良い蒼石セナンを原料とする建築製材に押され気味であつた。そのため、ナバラの煉瓦職人達は不景気の波に沈んでいる。

反対に、認定者集団グレミオは好景気に沸わいていた。認定者集団は落ちた島の蒼石施設セナンを何百年も守っている敵対的存在エネミーを掃討して、管理局が円滑に蒼石セナンの回収が出来るようお膳立てするのが仕事である。島が多く落ちている近年のロッシュでは、認定者集団の数が足りないほど仕事が多い。

探るような目付きをファンに向けながら、一呼吸ためて澄んだ声で宣言する。

「あたしは一目、エレナちゃんを見たいのよお！」

「ぶっ」

ファンは口に使っていた紅茶を、窓の外に盛大に吹き出して、むせ返ってしまう。

咳き込むファンの背中をさすりながら、グエンダは生暖かい視線で観察する。

「グ、グエンさん？ 本当に会うつもりなんですか？ 彼女は幼馴染みなというか、家が近所のエレナに勉強を教えてあげていただけの関係です。いや、なんですか、その目は？ ですから恋人という関係ではなくてですね……。ってあれ？」

ファンは口の周りを紅茶で濡らしたまま、必要以上に慌てふためいて支離滅裂だ。

（ほんと、情けない男よね……）

グエンダは心の中で弟分の醜態にため息をつきながら。

「まあ、遠回りって言っても、馬車の乗り換え一回位の違いだしね」
あからさまな感想は心の中のだけにしまい、当たり前障りのない内容さわを口にした。

ハンカチを取り出して口元を拭い、やっと落ちついたファンがたずねた。

「でもグエンさんの出身がノルトラインなのは知ってましたが、まさかオーデンだったとは驚きました」

ノルトラインはロッシュの北側に位置している。ロッシュ同様に島の牽引を許された最古の領国の一つである。

グエンダの故郷のオーデンはノルトライン国境のロッシュ側に在った。同じ国境同士とは言っても間に緩衝地帯かんしよつを挟むので、ナバラからオーデンまでは順調にいつでも駅馬車で半日ほどかかってしまう。

『浮かぶ国』では、島の牽引けんいんを認められた国と国との間に緩衝地

帯が設定されるのが通例である。これは領空に入った島を牽引する権利が何処いずれの国にあるのかをはっきりさせ、蒼石セナン収集を巡って国同士が争うことを回避するのが目的だからだ。便宜上べんぎじょう、干涉地の帰属は皇王家の領地となっている。しかし大部分は住む者も居ない荒地でしかない。

少しでも多くの島を確保するため、管理局は島が領空に入ったら即座に牽引を開始する。その際、居住地域が少なく、掃討の際に近隣への影響が小さい国境付近に落とされる島は多い。故に国境地帯の町には認定者集団が多く、ナバラ、オーデンも例に漏もれない。

「生まれは皇都だけだね。赤ん坊の頃に移り住んだらしいから、ぜんぜん覚えてないのよね。だから、自分では生粋きんすいのオーデン子って思ってるわ」

「そうだったんですか。皇都には行ったことが無いんですが、オーデンへは何回か行った事がありますよ。特に初めて行ったときは、見たことがない色々な機械があつて驚いたのを今でも良く覚えてますよ」

昔を思い出したファンが懐かしそうに細めた目は、どことなく寂しそうでもあった。

オーデンが属するノルトラインは『浮かぶ国』の領国の中でも一、二を誇る工業国である。独自の技術で造られた工業製品は有名であった。ファンは行商人をしていた両親の商品の買い付けに同行して何度が訪れたことがあった。

「帰るって言つても、すぐに戻らなきゃいけなし、まー、あたしと違つてお堅い両親だから、特に会いたいつて訳でも無いんだけど…

…。今回は他の用事もあるし」
明るく話すグエンダだったが、急に声をひそめて続けた。

「それに、お城でのんびりっていう訳にはいかない感じだったしね……」

珍しくグエンダの歯切れの悪いせりふに、ファンも心配そうに相づちを打つ。

「確かに、嫌な感じでしたよね……」

（ほんとにね……）

心の中で同意しながら今朝の出来事を思い出す。

城に戻って朝食を取っていた二人に言い渡されたのは、意外にも来週初めまで三日間の休暇を出すので、城から離れるとの事実上の命令であった。教えられた理由はロツシュ一族が多忙なためと伝えられた。

（部外者は目障りだから、休暇やるからどうか行けか……）

丁寧だが小馬鹿にした態度の侍従長は二人に、旅費も負担するから一度故郷にでも戻ったらどうかと提案し、遠回しに遠くへ行くように要求した。

（あたしが居たら不味いような、きな臭い会議で警護を外された事は何回もあったけど……。まー、休暇はありがたいから、別に詮索しなくてもいいんだけど、今まで会議など出たこともない、ミリアムまで関係するのは気になるけど

……）

一瞬、領主の一人娘ミリアム・ドナ・ロツシュの姿が脳裏をよぎった。

一年前ファンとの初顔合わせの際、淡く頬を染めて腰まである手入れの行き届いた栗毛を持ち上げ、照れ隠しに手元で巻き毛を作り、まともにファンの顔を見ることが出来ない貴婦人というにはまだ早い愛くるしい少女。

（普段は気難しい子だけにビックリしたはね……。あれを一目惚れって言うのかな？……。そういえば、幼馴染みのエレナってどんな娘かな……。って、これが息子の恋人が気になる母親の気持ちってやつ！？ うわぁー、最悪……）

グエンダは自嘲気味に軽く拳で頭を叩く。

車輪が石畳の上を転がる心地よい音を聞きながら、あれこれと妄想していたグエンダの視界に、三百メートルを超える大型輸送船の船体が入ってきた。

銀色の船体に陽の光を反射させ、澄み切った空にのんびりと浮かんでいる。輸送船はガリシアの空港に着陸しようと、ゆっくりと高度を下げ、馬車の方角へ向かっている。しばらくすると馬車は輸送船の陰に飲み込まれ、周囲の景色が色を失っていった。

「ねえ、今週に來た輸送船って何隻目？」

グエンドは窓枠に肘を着き、窓から入ってくる風に気持ちよさそうに深紅色の髪を遊ばせながら、ぼんやりと通り過ぎていく輸送船を眺^{なが}めている。

重量がある工業物資に関しては、蒼石^{セナン}からの精製が各国で行われていた。しかし、食料品や軍需品の精製方法に関しては皇王家が独占している。そのため、皇王家から現金で購入するか、蒼石^{セナン}を皇王家へ上納するかして、人間が生きていく上で欠かせない水や食料を定期的に受け取る必要があった。皇王家からの物資を止められてしまえば、どんな大国であろうと一ヶ月を持たずに崩壊してしまふ。

この制度は、『浮かぶ国』における皇王家の支配体制を盤石^{ばんじやく}のものとしている。

「確か……、今週は……五日で三隻目ですね」

質問されてファンは顎^{あご}に手をやり少し考えた後に、律儀^{れいぎ}に正確な答えを口にした。

「多いわね……」

三百メートルを超える輸送船の積載量であればガリシアの人口が必要とする水の十日分ほどを輸送できた。実際にはガリシア周辺の都市の補給分や水以外の食料品も運んでいるので、ガリシア周辺地域の補給としては四日に一隻の割合で皇王家からの補給があれば日常生活に支障^{せしょう}がでることはない。

「それだけ蒼石^{セナン}の収集が上手く行われている証拠ですよ。喜ばしいことじゃないですか」

ぼやっと空を見やるグエンドに対して、身振りを交えてファンは熱心に説明を続ける。

「諸島管理局の担当官の話では、この調子で島の落下数が増えれ

ば十年に一度の豊年だそうです。お陰で在野の認定者集団グレミオや生産者組合も随分と潤うるっているようですよ。浮遊紀五一二年度のロッシユ中間予測」

だが、ファンの熱心さは、グエンダに別な疑問を呼び起こした。

（管理局か……。確かに確実で立派な仕事だけど。そんなにも素晴らしいものなの？）

ファンに出会って暫くたってから、幾度いくど無く繰り返してきた疑問であつた。

一国の浮沈ふちんをも左右する管理局の仕事は、綺麗事だけでは終わらない。

表からは見えない所では、欲望をむき出しにした非情の世界であることを、認定者として暮らしてきたグエンダは肌身に染みて承知している。

命を賭けて稼かせごうとする認定者と、彼らを駒にして政策を実行する管理局の担当者。

（学生に毛が生えた程度の甘い考えでは潰れてしまう）

「ですから、ロッシユも完全循環型水蒸気機関の導入を検討する事が」

ここぞとばかりに額に汗を浮かべるほど熱中してファンは知識を披露し続ける。

しかし、ファンが熱中すればするほどグエンダの危惧は深く、重くなつていく。

子供のように楽しそうに話すファンの顔をみて、グエンダは確信する。

（この子は、管理局には合っていない……）

グエンダの考えは、友人として過剰な心配なのかもしれない。

でも、だからこそ本気で心配してしまう

暢のんき気に講釈を述べるファンに焦りにも似た苛立ちが募つつてしまう。上の空のグエンダを、とがめるようにファンが顔を覗き込む。

「って、グエンさん、聞いてます？」

ファンの小言を言う態度に、一瞬にしてグエンダの表情がこわばる。

（人の気も知らないで！）

紅茶の容器を力任せに握りつぶすと、窓から外へ乱暴に投げ捨てた。

「そんな事が楽しいわけ？　それがそんなに大切なの？」

心配な気持ちとは別に、思わず嫌みが口について出てしまった。

「自分から聞いたくせに……」

グエンダの反応に戸惑った表情を浮かべながらも、ファンはむくれて口を尖らせる。

ファンの表情にグエンダのもどかしさはさらにつのる。

「管理局に入る為とはいえ、ミリアムのお守りも大変よね」

「　　っ、ダニ様のお相手も大変そうですね！」

ファンも何時になく苦い言葉を吐き捨てる。

ミリアムのことと終始からかわれるファンだが、実はグエンダも似た状況である。

ロツシュ家の嫡男ダニ・ドン・ロツシュの女癖が悪いのはロツシュでは有名である。ロツシュの領民の下品な冗談にはダニがよく登場する。その中にはグエンダの器量に引っかけて、彼女を寝台警護担当などと揶揄する話もあった。

そして、グエンダがその噂を気にしていることを、ファンは知っていた。

「あんなエロエロな奴だと知ってたら、契約しなかったわよ！」

痛い所を突かれたグエンダは早口に捲し立てた後、ファンの視線から逃れるように顔を背けた。

ファンも不用意な発言に気付き、下を向き唇を噛んでいる。

意地を張り合った二人の間には、乗り込んだ当初のほがらかな雰囲気は消え去っていた。

（やつちゃったな……）

小さく溜め息をつきながら反省する。

ふと視線を感じてグエンダは振り返ると、後ろの乗客からの非難するような視線とぶつかった。

ロツシユはそれほど忠誠心が厚いお国柄では無い。しかし、蒼石^{セナン}の収集が順調で生活しやすい今の状況では、民衆の不満は少なく支配者であるロツシユ一族への信頼は非常に高い。後部の乗客のようにロツシユ家を愚弄するような話を咎める人は多い。

乗客の視線にはファンも気がついたようで、二人は慌てて取り繕うようにわざとらしく咳払いをし、窓の外に視線をそらす。

気まずい空気を残したまま、馬車は中心部を離れていく。

下町に入ると、屋根に蒼石^{セナン}の蒼^{あお}を配し、剣と島を意匠化^{いしようか}した紋章^{もんしやう}を高々と掲げるセラス教の集会所の他には大きな建物は見当たらず、不揃^{ふぞろ}いな日干し煉瓦の家屋が軒^{のき}を並べている。

セラス教は元皇王家の一員であったセラス・セヴァーンが唱えた『生きる事とは戦いである』を教義とする宗教組織である。現在では『浮かぶ国』の全土で、信じられている唯一の信仰と言っても良い。セラス教が創設三百年足らずで多くの信者を獲得できたのは、蒼石^{セナン}を用いる高額な外科治療が、信者は安く受けられるのが最大の理由である。

不意に、馬車の車輪が石畳の段差で跳ねて、車体が大きく揺れ馬が高く嘶い（いなな）た。

その時を待っていたかのように、気まずい雰囲気^{きふんき}が破られた。

「グエンさん」

「ど、どうしたの？」

虚^{きょ}を突かれて珍しくグエンダが慌てた。

大きく息を吸い込んで、ファンは深く頭をさげる。

「さっきは失礼な事を言いました。申し訳ありません」

（やっぱり、すごく不器用だわ……この子）

あまりに真っ直ぐな許しを請う言葉に、思わずグエンダは座席の中で後ずさってしまう。

「こっちこそ悪かったわね」

ごめんねとグエンダは自然に頭を下げた。

素直な謝罪にフアン表情が柔らくなる。

「あはは、照れくさいわね」

やや赤みを帯びた頬に手を添えながら、誤魔化すように言った。

そして今度は一転して、グエンダが表情を引き締めた。

「グエンさん？」

「フアン、さつきは悪かったわ。でも……」

一瞬、言葉に詰まった後、覚悟を決めたように続けた。

「……でも、少し聞いて欲しいの。管理局はあなたが考えているほど甘い所ではないわ。悪いけど、ミリアムの子守とじゃ比べようがないほど、ドロドロとしたとこなのよ。あんたの頭が良いのは知ってるわ。けどね、しっかりとした自分の考え方、……いえ信念を持たないと潰れるわよ。管理局に入っただけがいいが無事に続けていけるのか、少し心配なのよ……」

一気に心にあるわだかまりを吐き出した。

しばらく考えた後、フアンは偽らない気持ち^{いつわ}を口上げる。

「有り難うございます。頼りない男なのは自分でも痛いほど解っています。……でも、大学の仕事を辞めてまで手に入れた絶好の機会です。ここで諦めたりしたら私には何も残りません。それに」
今一度、自分の中の覚悟を確かめるように言葉を止める。

「私なりに覚悟は決めているつもりです」

フアンは静かに、しかしはっきりと言い切った。

ミリアムの専任教師になる前にフアンはガリシアにある上級大学の助手の職にあった。専任教師の仕事に応じる際に、担当の教授からは引き留められていた。その時に教授は大学には席が無くなるので、同じ職には戻ることは出来ない^{おあけな}と警告していた。

大学に長くいる教授は短期間で多くを得ようとして失敗した若者を多く知っていた。

瞬間、二人の真剣な視線が重なり、そして別れる。

グエンダは大袈裟^{おおげさ}に天井を見上げて肩をすくめてみせた。

「あーあー、ほんと役人になっちゃうのね。すじが良いだけにもつたいないわよ」

「もう、勘弁してください。筋肉の付き方を見れば嫌でも実感できます。グエンさんのお陰ですよ本当に感謝しています」

ファンもわざわざらしく服を捲り、腕に力を入れて力こぶを自慢する。

二人はお互いの顔を見合わせて笑う。

あったかな空気が座席の間に戻ってくる。

「でもこうやって、話せるのも、もう少しですね。寂しくなります……」

しみじみとファンは述べた。

「そうね、あたしもあと一ヶ月ほどで護衛の契約が切れるしね」

「その後はどうなさるんですか？ 今の仕事以上に、条件の良い仕事があるとも思えないのですが？」

少し身を乗り出して、心配そうに上目遣いで尋ねた。

グエンダが護衛の契約を更新を希望しないのは、普段の言動から簡単に推測できた。しかし、認定者は生きていくだけで費用が膨大に掛かる宿命であり、グエンダの過激な振る舞いの多くが、駆け出しの頃にお金の事で苦労したためであることをファンは氣遣った。

グエンダは心配ないと手の平を振りながら、笑顔で答える。

「オーデンに戻ったら、前に世話になつた認定者集団のやつかいになるつもりよ。詳しくは聞いてないけど、あたしが居た頃の古株の面子は独立して、人数が減ったから構成員を集めるらしいのよねまー、駆け出しの時よりはましな条件を貰えそうよ。実は、今回は親よりもそっちに挨拶したくて帰るようなものだし。危険は増えるけど、稼ぐには認定者集団は良い商売だしね！」

日常の言葉遣いからは信じられないほど、人付き合いに関しては義理堅いグエンダである。

認定者集団という名前から、構成員全員が認定者と思われがちだが、規定の上では最低一人以上の認定者が加わっていれば認定者集

団として認められる。勿論、複数の認定者が所属する認定者集団^{グレミオ}の方が純粹な掃討力が向上するのは事実である。しかし、維持費などの面から少数の認定者と強化を受けていない一般人で活動する認定者^{グレミオ}集団も珍しい存在では無かった。

グエンダは鞆から新しい容器を取り出して、豪快に半分以上を喉に流し込んでからたずねた。

「街を抜けたから、あと四時間位だっけ？」

「ええ、着く頃には夜になってますね。」

残りを一気に飲み干して、突然思い出したように、にやっと笑った。

「あーあー、私も空中浮遊車^{ランドホバー}で帰りたいわ。それなら十分ほど着くのに！」

今朝の件がまだ頭を離れないようで、ねちねちと嫌みを言う。

「それこそ蒼石^{セナン}の無駄使いですね」

まともに取り合わずやれやれと肩をすくめた。

グエンダは軽くフアン^{グエンダ}の頭をこづき、やけくそ気味に切れた。

「うっさい、真面目な話して疲れたから、あたしはしばらく寝る」

「……わかりました」

フアンは笑いながら頭をさすった。

馬車はとうに市街地を抜け、先に広がるのは雲一つ無い澄み切った空と茶褐色の乾いた大地。その中に、踏み固められて濃い色に変わった道が一本、何処までも真っ直ぐに続いている。

chapter 1-2 帰郷（後書き）

色々と変更していたら「序」が長くなったので分けました。
誤字脱字のご指摘、ご感想を聞かせて頂ければ幸いです。

chapter 1 - 3 瑠璃の城

ファン達が出発したのとほぼ同時刻　ガリシア郊外の森でも心地よい風に若葉が舞い、午後の光が樹々に降り注いでいた。

その森の中央から、突き出す険峻な丘の上にロッシュ領主の居城は建てられていた。

城の姿はガリシアの街からも屋根に塗られた瑠璃色がはつきりわかるほどで、その素晴らしい眺めは街の名物でもあった。

城は乳白色を基調とし、見上げるような城壁に四方を囲まれ、居住部分は巨大な直方体と円柱が前後に幾つにも組み合わさった造りをしている。

城の見晴らしの良い最上階に城主の執務室が置かれていた。

今、執務室へ流れ込む快適な風とは裏腹に、わずかに開いた窓から漏れ聞こえてくるのは言い争う男女の声であった。

「ふう……」

執務室の中でも一際目立つ磨き上げられた、巨大な机を挟んで目の前に立つ娘の態度に、ロッシュ領主ロサーノ・ドン・ロッシュは、椅子に腰を掛けたまま深いため息をついた。

民家が一軒入りそうなほど広い部屋には『浮かぶ国』では滅多に見ることの出来ない天然木材で作られた、椅子や机が趣味良く配置されている。部屋の奥には据え付けられた暖炉を中心にして、左右の壁に掛けられた歴代領主の肖像画の枚数がロッシュという国の歴史を感じさせた。

しかし、優雅な部屋を支配するのは物々しい空気であり、それは二人の間の緊張がただごとではないことを物語っている。

ロサーノは、老人と呼ばれるにはまだ早い五十五歳。見る者を威圧する射るような眼光に、低い背丈ながらも壮健な体つきだ。時には娘に甘いと言われるが、国を治めるに相応しい威厳を持った男である。

だが、ロツシュ最高権力者の顔には、困惑と焦りと苛立ちの三つが一つとなつて、何とも言えない苦い顔つきである。

父の前に立つ、娘のミリアム・ドナ・ロツシュは、清楚な顔を曇らせ、目線を床に落としている。彼女の細い指は色が変わるほどきつく握りしめられ、ふつくらと柔らかい唇をきつく噛みしめ、床を凝視する瞳には苦しみの色が見える。

普段はあどけない微笑みを絶やさず、活発な愛くるしい少女の面影は、その姿からは思い描くことはできなかった。

娘に向かってロサーノは再び同じ内容を口にした。

「急な話ではあるが何が気に入らん？ 皇都の大学へ進学するというのは、滅多に叶えられない幸運だぞ？ そなた、以前から皇都に行きたがつていたではないか？」

『浮かぶ国』の支配者、皇王家が治める街、皇都。

皇都は機能性と快適さを徹底的に追求するために蒼石をふんだんに使つて造られた都である。その都市は、人工頭脳により制御され運行される蒼石輸送機関や、内科医術と蒼石外科治療の融合知識を教える皇立医術大学など数えきれず、人体に適切なように気象まで管理されている。

皇都は『浮かぶ国』に生きる者にとっては貴族、民衆に関わりなく憧れの都市である。

しかし少女は、父の甘言に眉をつり上げ、面を上げて睨み付ける。……なにが進学ですか、そのような戯言を信じるほど子供ではありません！ 様々（さまざま）な制約を付けられていては、体の良い人質ではありませんか？ 何故、わたくしがその様な仕打ちを受けないといけないのですか？ 元はと言えば、お父様達の行いが原因なのではありませんか？ それに……」

激情に駆られて言葉を発するも次第に力を失つて行き、きつく閉じられた唇には痛々しく血がにじんでいる。

ロサーノは敢えて口を閉ざしたまま顎で続きを促した。

「昔からお父様も、お兄様も、女を道具のように見ておられます…

…」

心の底にある濃くて苦い想いを吐露した。

娘が喋り終わるを待って、ロサーノは言い付けを守らない幼い子供を諭すように、ゆっくりと、しかし重々しく断言する。

「ミリアム、お前の考えはわかった。だが僕はそなたの希望を聞いているのではないのだよ。これはロッシユ家当主として、決まった話として伝えておるのだ。わかる」

「お話はお伺いしました。でも納得した訳ではありません！」

もはや会話でさえ厭わしいと言うように父の言葉を制止した。

ばんっ、と手のひらで机を叩きつけ、ロサーノが大きな声を上げる。

「ミリアム！」

「お父様、わたくし気分が優れないので部屋に下がらせていただきます。」

はつきりと態度を表明し、きびすを返して背中を向けると足早に扉に向かった。

「待たんか！」

「失礼いたします」

がたつと、立ち上がった父を豪奢な栗毛の束が振り返ることはなく、扉の向こうに消えて見えなくなる。

部屋には装飾を施された厚みのある二枚扉が乱暴に閉まる響きだけが残された。

「全く、子供だの……」

ミリアムが消えた扉を見つめながら、ロサーノは呆というよりも失望の言葉をため息に交えて椅子に深く腰掛けた。

ロサーノはやれやれと頭を振ると、視線を部屋の奥に向けた。待っていたかのように暖炉の側の肘掛けいすに座っていた男が、のっそりと立ち上がる。

ダニ・ドン・ロッシユは華奢というよりは病的に痩せていた。ダニの不気味に淀んだ瑠璃色の眼を、三十の男にしては不健康にくす

んだ白い肌と妹とよく似た癖のない栗毛がさらに浮き彫りにしている。

もったいを付けるように歩を進め、先ほどまでミリアムが立っていた場所に椅子を引き寄せると、ことのほか面倒臭そうに腰を下ろした。

細めた眼を父に向けると、ダニは次期領主とは思えぬ乱暴な口ぶりで話し出した。

「俺としては、はつきり『人質として皇都に行き、皇王家の何れいずの馬鹿息子でもかまわないから誑たらし込め！ 出来るのは女の貴様だけだ期待しているぞ』位は言って欲しかったですな」

突拍子とつぽうもない内容だが、ダニのべとつく瞳には戯れたわむの色は一欠片も見られなかった。

「儂はそんな事までは望んではおらん」

息子の言葉に、ロサーノは眉間を押さえずには居られなかった。

ダニは唇を釣り上げたまま、嘲りの感情を隠しもせず続ける。

「親父殿はわかってませんな。そう言ってやった方があいつも喜ぶと思いますかね。どちらにせよ親父殿はミリアムに甘い。そんな事だから、皇王家にも目を付けられる。どちらも十分に予想できた事態ですな」

ダニとミリアム、同じ父と母から生まれながらも、年の差以上に兄妹は本質的に全てが違っていた。ミリアムの楚々として凜とした雰囲気とは正反対に、ダニからは猥雑で全てを見下したような意地の悪さが感じられた。

さすがに腹に据えかねたロサーノは鋭い眼光でダニを見据えた。

「その様な事など、どうでもよいわ！ 今回の皇王家からの要求は絶対に飲まねばならん。断ればロッシュは破滅」

「何もそこまで焦るこたあ無いでしょうが……」

ダニは大袈裟おおげさに顔をしかめて、唾を飛ばして激昂する父を遮さへった。大国のロッシュといえど、食糧供給を支配し、無尽蔵に蒼石セナンを使える皇王家との戦いくさに勝てる可能性は殆ど無い。しかし、皇王家が実

際に行動を起こすのは最終局面であり、今はその時では無いことをダニは理解していた。

「そのふざけた話し方、なんとかなんなのか？ 獺色の件といい、城下で物笑いのネタになるなど、ロツシュのの品格を貶めおつて！」

ロサーノの顔面は赤みを増し、声もさらに大きくなった。

「品格？ そんな下らんものより、今は重要な話があるはずですが？」

父親の非難をダニは冷静に軽く肩を竦めて受け流す。

つかの間、二人の間を見えない緊張の糸が幾本も走る。

「っ」

先に糸を断ち切ったのは、冷静に現状を分析する息子より事態に動揺する父親であった。

「ふん、上手く言い逃れよつて。で、どのようにするつもりじゃ？」

ロサーノは感情を押し殺して、忌々（いまいま）しそうに続きを促した。

ダニはわざとらしく鼻を鳴らし、やれやれと両手を大きく広げた。
「それでは皇都での顛末とやらを、もう一度整理するとしますか、親父殿。皇王家は、我らがロツシュのきな臭い行いに気がつき始めた。しかし、全てを把握しているわけでもない。と言うことですか、？」

「ああ、それは確かだ。もし諸島統括庁が全てを知っておつたらこの様な回りくどい真似はせんだろう」

ロサーノは鷹揚に頷いた。

諸島統括庁は皇王家の直属の機関であり、『浮かぶ国』全土の島の動きを観測し、予測する事を主な職務としている。一方で、統括庁は島に関する法に従わない貴族を見つけ出し、保有する蒼石武器で処罰する仕事も担当している。

ゆえに、不正を行う貴族にとって統括庁の名は恐れと憎しみを意味する。

軽く頷き、ダニは言葉を続ける。

「我らへの揺さぶりのために、ミリアムを皇都へ招待という名目で差し出せと要求してきた。あつてますかな？」

「そうだ、後ろ暗い所がなければ問題ないだろうと言外に匂わせおったわ」

ロサーノは皇都での会談の内容を思い出し、惘然とした表情で答える。

「そして、ミリアムが皇都に行けば、取りあえずは時間稼ぎが出来る。どうです？」

「ああ、忌々しいが、お前の言う通りだ」

ダニは、まるで熟練した遊戯ゲームの駒の動かし方を教えるように解説する。

「それなら話は簡単でしょうが。向こうのお膳立て通りに話が進むのは癪ですが、時間が必要なのは此方も同じですから……。この後の皇王家への対応の方はもう少し情報を集めてから対応するとして、ミリアムには早々に納得して貰いますか。それに、親父殿は大袈裟に考えすぎですな。所詮は二十歳にも届かん小娘の扱い、なんとでも出来るでしょうが？」

酷薄な笑いを瞳に浮かべながら、実の妹を平然と駒として扱う。

「何か考えがありそうだが、今回は向こうの耳に入るような派手な事では困るぞ？」

一度、遠く皇都の方角を見やってから、ロサーノは視線をダニに戻した。

「こんな細かいこと、俺が直接動かずとも良いでしょうが……。そうそう、例の家庭教師に一度説得させてみればどうですか？ ミリアムは奴に恋心とやらを抱いているそうですから、案外と上手くいくかもしれませんな」

買物で余った硬貨で籤くじを買うような気軽さである。

妹の純粹な思慕ほしの情も、この男に掛かれば嘲りあざわらと計略の対象ではない。

「あのような頼りない奴に任せて上手くいと思うのか？」

「駄目で元々、奴がへまをしても俺に何の痛みもありませんな」

ロサーノはひととき思案する表情を浮かべた後、ためらいがちに口を開く。

「……そうだな、それでは、お前の言うとおりにするか……、手筈は任せる」

「承知しました。では、侍従長にでも指示をだしておきますか」

これでは話は終わりとはかりに、ダニはそそくさと立ち上がった。「なら、次の手を考えるまで時間もあることだし、俺は新しい護衛候補にでも会つてくるとしますか」

「護衛官なら既におるだろうが？」

またかと、ロサーノの顔に侮蔑の表情が浮かぶ。

「あいつは靡かんのでもう解雇ですな。今度の赤毛は少し顔は落ちるが、如何にも好きそうな体つきだと聞いているので期待できますな。なんなら、憂さ晴らし親父殿も一緒に味見しにいけますか？」

「馬鹿者！」

「へへへ、冗談の解らん人ですな。では失礼」

ダニはふざけた調子で、役者のお辞儀のように、手を胸にあて大げさに頭を下げる。

そして足早に外へ向かつて歩き出し、扉を閉めることなく部屋を出ていった。その顔には先程の話などすっかり忘れさり、歪めた口元には下卑た期待感を浮かばせている。

扉が開け放たれたことで、執務室の窓からは爽やかな風がより強く流れ込む。

部屋の外では、先ほどと変わらず瑠璃色の屋根に心地よい午後の光りが降り注いでいた。

chapter 1 - 4 幼馴染み

「それでは、乾杯ー」

多くの客で混雑する店内の喧噪^{けんそう}を、陽気な女の澄^すんだ声が打ち抜いた。

ロッシユ国境ナバラの町は騒々（そうぞう）しい。

闇^{やみ}が空を支配して随分^{ずいぶん}と涼しくなった盛り場を、汗で汚れた半袖^{はんそで}の胴衣を着た職人たちが野太い声で笑いあい、防護服を着込んだ認定者^{グレミオ}集団の一団は通行人を威嚇^{いかく}するように歩き、大胆に肌が露出^{ろしゅつ}した薄着の女は腕を組む男の耳元で囁^{ささや}いている　様々（さまざま）な人達が石畳の上を通り過ぎてゆく。

そんな短いながらも活気のある、大通りからちよつと脇に入った場所にある一軒の店。思い思いに酒を飲んだり大声で談笑^{だんしやう}する客でこった返す庶民的な酒場だ。その店の二階部分を吹き抜けにした広間の一番奥の四角い卓に、陽気な赤毛と仏頂面の金髪の女性二人と、妙に落ち着きがなくおろする黒い髪の男、の三人が座っている。既に卓の上には注文した料理が重なりあつて並び、食欲をそそる良い匂いと、もうもうとした湯気が、立ち込めている。

『浮かぶ国』では、蒼石^{セナン}から精製された有機材料で食事が作られている。ナバラへも月に二回の頻度^{ひんど}で補給される精製食材は見た目も変わらず美味であり、二、三回高級な自然食材の料理を食べた事がある位では食材の差が感じられない。

それ故に、『自然食材を使った新米料理人の晚餐より、蒼石^{セナン}食材を使う母親の晩飯』の言葉は昔から『浮かぶ国』全土での常識だった。

だが、ご馳走を前に目が死んでいるファンのしよっぱい顔を見れば、久しぶりに幼馴染^{おさななじ}みとご馳走を楽しむ雰囲気ではなかった。（どうして、こうなったんだろ・・・）

ファンはつい二時間ほど前の出来事を思い起す。

ファンにとって悲劇の幕開けは路線馬車の駅舎だった。

オーデン行きの馬車乗り場に目立つように掲げられていたのは『掃討中につき運行停止中』の札。係員に確認したところ、「経路の近くに落ちた島の掃討を行っているので、今から四時間ばかり待つて欲しい」と説明された。グエンダをすぐに馬車に乗せて送りだそうと考えていた、ファンの計画は脆くも狂いだした。

予想外の状況に慌てるファンは、四時間もする事が無いとむくれるグレンダに押し切られてしまい、結局はグエンダの希望に従い、エレナの家へと歩き始めるしかなかった。

第二幕は、エレナと母親のラリが切り盛りする自宅兼宿屋であった。

ラリの宿は、懐には優しくないが価格に見合った持て成しで知られており、それなりに繁盛していた。

グエンダを伴って宿の扉を開いたファンは、一瞬にして暖かい宿の空気が凍りつくのを感じた。見た目だけなら文句の付けようがないグエンダを連れたファンに対して、以前から折り合いの悪い母と不満が貯まっていた娘の二人が好意的である筈がなかった。左と右に分かれて捲し立てる二人に対して、ファンは頭を低くして釈明に徹するしかなく、言い訳もそこそこにエレナを食事に連れ出したのであった。

（不運が重なっただけだよ……、僕は悪くない！）

華やかな席の中で、辛気くさい表情のファンは地味な服装と併せて浮いている。

そんなファンの目の前に座る、何時にもまして陽気にはしゃぐグエンダは、馬車で着ていた上着を脱ぎ、すらりとした体の線が明けて透けになる袖のない胴着に、切れ上がった太股を丈の短い穿袴から見せつけるように晒し、燃えるような深紅の髪がうなじに掛かる姿は何時にもまして妖しく見える。

一方、隣の席には再会して以来、ぷうと頬を膨らませているエレナも、わざわざ大胆な意匠デザインの上着に着替え、大きく開いた胸元から零れ見える形の良い胸の谷間に、櫛くしの通ったさりとした金髪が流れ込み、幼い顔立ちとは裏腹に女を感じさせる。

二人の魅力を証明するように周囲の男性客からは、数え切れないほどみだらな眼差しまなざしを突き刺してくる。

（エレナの格好は……、一体どうしたんだろ？）

細やかな乙女心にも気が付かないファンは、折角のエレナの姿に戸惑いばかりを感じてしまう。

困惑するファンに関係なく、酒席は動き出す。

グエンダは汁の滴る肉料理したたを手に取り、がぶりと嚙かじりながらエレナに確かめるように尋ねた。

「エレナちゃん、もう怒ってない？」

グエンダは自分が同行したことで、エレナがむくれていることに触れた。

エレナは慌てて手のひらを振って否定する。

「いえ……グエンダさんには（・・）何も怒ってません。私こそ、さつきは変に騒いじやって、ごめんなさい……。最近、ちよつといらいらすることが多くて　って、ファン！　誰のせいでこうなったのよ？　あなたも謝りなさいよ！」

エレナの目は素知らぬ顔のファンを睨にらんだまま、がしつと皿を割らんばかりに箸はしを料理に突き立てた。

「え？　は、はい……すいませんでした」

ファンの視線はエレナに吸い付けられたままで、グエンダに謝った。

（なんで僕が謝らないといけないんだ！）

悪者にされたファンは口をへの字する。

「ふふ、気にしないでいいわよ！。あたしもいきなり来ちゃったんだし。まー今日は飲みましょう！　ファン、ついでついで！」

「ファン、私にもちようだい」

「……」

差し出された二人の杯に酒を入れながら、ファンは小さくため息をつく。

（逃げ出したいよ……）

一人盛り下がるファンを放って、二人は大いに盛り上がる。

グエンダは陶器製の杯に並々と注がれた蒸留酒を次々と空にし、エレナは湯気が残る料理を片っ端から片付けていく。

杯を傾るのが止まらないグエンダは、目を輝かせて質問を始める。
「ねーねー、ところで二人は幼なじみっていうけど、くわしくはどういう関係なの？」

エレナが少し恥じるように俯きながら答える。

「私、昔から読み書きがダメで……。それで近所に住んでたファンが教えてくれて、それから仲良くなって……。私それで読む方はかなり出来るようになったんですよ！ でもファンったら、手紙に『書く練習はしてますか？』って、いつも書いてくるんですよ？ グエンダさん、もっと他に書くことあると思いませんか？」

『浮かぶ国』の初等教育において最低限の文字の教育は行っている。しかし学校に行くことは義務ではないので学校に全く行かない子供も多くいた。それは、ある文章が読めて、自分の名前が書ければ『浮かぶ国』で生活するのにそれほど困らないので、家の手伝いを優先させる親が多いからだ。

ましてや手紙を自力で書ける者は成人の半分も居なかった。

「そんなこと気にしないでもいいわよー。だけど、ほんとファンらしい話よね。頭良いけど、馬鹿だからね。もっと大事なことを書かないと駄目よね、あはは！」

グエンダは卓をばしばし叩きながら大笑いする。

「馬鹿とはなんですか！ じゃあ何て書けばいいんですか？ 笑ってないで教えて下さいさい！」

「なによファン、あんた逆ギレ？ それくらい自分で考えなさいよ！」

「ほんとよねー、エレナちゃん。少しは『愛する君の直筆の手紙が読みたい』くらい書けば格好が良いのにね」

自分が切れている事を棚に上げて文句を言うエレナと、気の利いた台詞^{せりふ}を言えないフアン^{ファン}の性格を知っているのに指摘するグエンダ。顔を見合わせて笑う女二人に為す術^{なすべ}もなく蹂躪^{じゆうりん}されるフアンであった。

場が騒^{さわ}がしくなるのと同時に、杯に注^{そそ}がれる酒の量も加速度的に増えてゆく。

「ふうー、追加で同じ酒三杯もってきてー。でもフアンが自慢するだけはあるわよねー」

一気に酒を飲み干して、忘れずに追加の注文を入れる。

「えっ？ グエンさん、何がですか？」

「エレナちゃんが思ったよりかわいい子で、お姉さんもビックリよー！」

満面の笑みの中にわざとらしく見開いたエレナの瞳も、横目でフアンを伺っている。

「えー？ グエンさんこそ、すらっとして女の私から見ても羨ましいですよー」

グエンダはしらじらしく視線をエレナの胸元に落としてから言う。

「おっぱいもこんなに太つき、うらやましいわ」

エレナは思わせぶりに口元を両手で覆い、

「フアンもそう思う？」

とフアンに尋ねながらフアンに向けて、ぐぐぐと自慢げに胸を突き出す。

肩に尖った先端が触れた瞬間、フアンは背筋にぞくぞくとするものが走るのを感じた。

（あわわわ　　）

よく知るはずの幼馴染みの意外な行動にフアンは慌ててしまう。

「エレナ！ 弱いのに飲み過ぎでしょう……」

エレナはつーんと澄ました顔でわざとらしく顔を背けると、金髪

がぱさりとファンの顔の前で揺れた。

「あはははー、ファンはほんと女の扱いがなってるない」
「痛っ！」

ファンは頭をがしがしと小突かれた。

（早く馬車動いてくれないかな……）

ファンは引きつった笑みを見せるしかなかった。

宴が進むにつれ、ファンには抵抗する気力がなくなり、これ以上騒ぎが大きくならないように大人しくすると決めていた。

「そういえば、さつき少し気になったんだけど、もしかしてお母さんとファンって仲悪い？」

エレナは困ったように狭い眉間にしわを寄せて答えた。

「ファンがうちの仕事を手伝わないので、母さんはファンのことを良く思っていないです……。うちの宿は母さんが死んだお父さんと頑張ってるよってきて、凄く思い入れのある場所だから……。私と私の旦那さんにも手伝って欲しいっていつも言ってるんで……」

グレンダは頬杖をつきながら、ふむふむと相づちを打つ。

「なるほど……、それはキツイはね……。ファンもエレナちゃんのためにちよつとは手伝ってあげればいいのね。ほんとに肉体労働きらいだね」

（見え透いた媚びを売りたくないだけです。変に期待持たせるよりはいいじゃないですか！）

ファンは酔っぱらい相手に説明するのを既に放棄している。

「見た目だけはいいだけに、始末が悪いわよね」

「あはは、本当ですよね！ あっ、そうだ！ ファンはお城でちゃんと仕事してますか？ 私が聞いても少しもお姫様のことは教えてくれないんですよ」

「いやー、それがね聞いてよ」

意気投合した女二人の会話は途切れること無く続いていく。

二人の間に入れないファンのもどかしさがとうとう溢れてしまう。
（もー耐えられない、限界だ！）

何回目かの暴露話にファンが耐えきれずに立ち上がろうとした瞬間。

グエンダがぼつりと漏^もらした。

「島のエレナか……。二人を見てると、ほんと実感出来るわね」

何時の間にか真面目な表情に戻っていた。

「え？」

「あっ！」

エレナとファンの驚きと疑問の言葉が重なる。

「いやね今朝、ファンが言っていた言葉よ」

エレナを見つめながらグエンダは穏やかな口調で続ける。

「手に届かないお嬢様よりも、もっと大事な者があるって言ったのよね。それで気になってナバラまで付いて来ちゃったのよね。でも会えて良かったわ！」

「グエンダさん……」

ファンは顔を赤くしてそっぽを向き、エレナは嬉しそうであり申し訳なさそうな、本人にもはっきりしない表情を浮かべた。

二人を見るグエンダの顔に浮かぶのは、子供を見つめる母親のように穏やか笑顔であった。

「今日は二人つきりになれる時間を邪魔してごめんね。あたしもこの男と落ち着いて話せる時間って、あまりないから……。今日は無理矢理ついてきたけど、あなたと話せて良かったわ。頼りない奴だけどあたしも応援するから頑張つてね！」

言いたいことは全部言ったとばかりにグエンダは立ち上がる。

「グエンさん……」

「それじゃ、そろそろ馬車も動くだろうしこの辺で邪魔者は消えるね。おわびに今日はあたしのおごりにしとくわね」

グエンダは、すつきりとした晴れやかな笑顔を浮かべて給仕呼んだ。

勘定を済ませると、そのまま足早に店を出ていった。

立ち上がってグエンダを見送った二人は、顔を見合わせて座り直

した。

「はあー。いい人なんだけど、疲れるよ」

しみじみと溜息をついた。

「えー、ひどいー。今度グエндаさんにあつたら絶対言つてやるからね」

「　　つぐ。いいから、気を取り直して飲み直そうか！」

「そうね私も、さっきの月と島の話をくわしく聞いてみたいしね？」
朗らかに談笑する二人は仲むつまじい恋人以外には見えなかった。

（やっと落ち着ける……）

肩の力が抜けたファンは、今更に何も食べていないのに気がついた。

新たに注文をするために、給仕を捜して店内を見渡たす。

（ん？）

その視界の端に卓に近づいてくる長身の男が居た。

「悪いが邪魔するぜ」

男は全く悪いと思っていないように、どすんとグエндаが座っていた席に腰掛ける。

二人からは年上、三十歳前の掛け値なしに認定者に違いない、がつしりした男だ。

「ム、ムント！」

驚愕にエレナの目と口がまん丸に見開く。

エレナの声がファンが幼いときの記憶を呼び起こす。

「えっ？　ムント？　……ムント・イバニエス！？　認定者になつてたんですか……」

男の顔をじっくりと見返せば、同じ地区に住んでいた六歳年上の子供の面影があるのにファンは気が付いた。
おもかけ

ムントは金属で補強された赤い防弾防護服に、腰には凝集した蒼セ石武器を四つも吊し、白い物が混じる黒い短髪は今までの苦勞の大ナシきさを感じさせる。鍛えられてごつごつとした体格に、四角い顔は交渉相手としては厄介だと感じさせる。

ファンの疑問には答えずに、エレナに顔を向けて話し出した。

「用があつて家に行ったら、ラリさんに多分ここだろうと言われたんだな」

事情を説明すると、さも面白くないと鼻を鳴らして厳しい視線をファンに浴びせた。

「さつきから見させて貰っていたけど、女二人も連れていい気なモンだな、ファンよ！俺はてつきり、ガリシアの新しい恋人でも連れてきて、エレナと別れ話でもするのかと思つて黙つてたんだが、どうやら違つたようだな」

ファンは嫌みなほどに自信過剰なムントの性格を思い出し、眉をひそめた。

「あなたには関係ないことです」

きつぱりと吐き捨てた。

「何？　そう思つてんのはお前だけじゃないのか？　なあ、エレナ？」

その眼はファンこそ関係がないと嗤^{わら}っている。

「あのね……」

エレナは怒るというよりは、心配そうな表情を浮かべている。

（ど、どういうこと？）

ファンの視線が二人の表情を確かめるようにさまよう。

「お前が瑠璃^{るり}の城のお姫様と遊んでいる間に、世の中は動いてるってことだ」

「ムント、いい加減にしてよ……、私の気持ちはもう話したわよ？」

卓に視線を落としたまま話すエレナの声に力がない。

三人の周囲は酒の摘^{つま}みとばかりに成り行きを見守っているが、どちらかと言えば美女二人を連れていたファンに冷たい雰囲気だ。

「エレナ、俺は言つた通り認定者^{グレミオ}集団を立ち上げた。これからは認定者^{グレミオ}集団の長として、このナバラでやっていくんだ。それをラリさんは認めてくれている。ここまで言えばわかるよな？」

「ムント……、今は考えられないとその話は断つたわよ」

たった一人の肉親の名を出されて語気がさらに弱くなる。

（な、なんでラリおばさんの名前が出てくるんだ？　ということなんだ？）

招かざる幼馴染みに面食らうファンの思考は堂々巡りから抜け出せない。

エレナのいらいらの原因の一つはファンのはつきりしない態度だった。

だが、一番の原因はムントからの強引とも言える口説きであった。一度はエレナに振られたムントだが、諦めずにファンに不満を持っている母のラリを味方につけて、再び猛烈に迫ってきているのだ。ムントはここぞとばかりたたみ掛ける。

「『今』はだろ？　俺も今すぐとは言って　」
話が見えずに苛立つファンの叫びがムントの言葉を堰き止めた。

「そんな事を言いたいがために、貴方はきたんですか？」

怒りのあまりファンは拳を握り締め、思わず腰が浮きかかる。

しかし、命のやり取りを繰り返して来た認定者に教師の威嚇が効くはずもない。

「そう凄むなよ先生、挨拶^{あいさつ}だけだ。今日は部下達と俺の認定者集団結成の祝いの日だ。一般人殴るようなけちくさいことはしたくない、縁起でもないからな」

ファンを軽く鼻であしらって、後ろを振り向いたムントは店の入り口の辺りを顎で指す。

視線の先には、店の入り口の辺りで各々真新しい防護服を着込んだ若者達がファン達の様子を伺っていた。

「それはそうとエレナに聞いたが、お前、管理局の役人を目指してるそうだな？」

「それが何か？　認定者集団担当になったら、えこ贔屓^{グレミオ}でもして欲しいんですか？」

「はあっ　十七の小娘のご機嫌取りしてる、お前に言われたくないぜ！　しかも、管理局のミスで親を亡くしたおまえが管理局の役

人だと？」

「何だと！」

ファンは席を蹴ってムントに掴み掛かる。

行商人だったファンの両親は四年前に牽引中に軌道を外れて落下した島の衝撃波に馬車ごと巻き込まれて亡くなっている。事故の原因については『連絡の行き違い』とだけで、はつきりとしたことは解明されていない。だがロッシュだけで年間何千と落ちる島がある中で、ファンの両親の様に島に関する事故に巻き込まれる事はとりわけて珍しいことではなかった。

珍しいことではないと言っても、馬鹿にされてまで聞き流せる内容でもない。

「やめてよ！ 二人とも」

エレナも我慢できずに立ち上がり、今にも殴り合いを始めそうな二人の間に必死で割って入いろうとする。

「ふん、助けられたな」

余裕のムントは肩をすくめてから、立ち上がった。

「今日の所は帰る」

ムントは「今日」という言葉を強調した。

そして今一度ファンに顔を向ける。

百八十センチを越える巨漢は目の前に居るだけで、ファンは重圧感に襲われる。

「俺には命を賭けて守るべき物がある。エレナもその内の一つだと思っている。そのためにナバラで、大事なものを、大切なものの傍にいます。遠くガリシアに居るお前は、エレナの横に立つ資格が有ると思っっているのか？」

ムントはファンの答えを待たずに背を向けた。

「俺は仕事でガリシアに行くことも多い。次に会った時は容赦はしないぜ」

向こうを向いたまま軽く片手を上げ別れを告げると、入り口に待たせた部下を連れ店を出ていった。

卓の周りの緊迫した空気が、朝日に当たる霧のように消えてゆく。ファンとエレナ、毒気を抜かれたように、どちらからでもなく無言のまま店を出た。

人通りが少なくなった店の外で空を見上げれば、遮るものが何一つない中を幾つもの蒼い筋が蠢いている。

昇っていくもの、迷うに円を描くもの、地上に真っ直ぐ落ちるものの

目の良いファンには落とされる島を肉眼で捉えることができた。

（あの先でも今から認定者集団が掃討を始めるんだよな……）

今日一日の出来事が強烈すぎて、取り留めないことを考えてしま

う。
（エレナ、グエンダさん、ラリオばさん、ムント……、資格とか言われても……一体僕にどうしろって）

突然、横からファンの脇腹に肘が食い込んできた。

隣に並んで歩くエレナは出会ったときと同じように頬を膨らせている。

「ちよつと、何考えてるの？ 言いたいことがあるなら言えればいいでしょう……」

エレナの態度は乱暴だが先程の勢いがなく、目線は前を向いてファンを見ていない。

「色々と多すぎて、頭の中が整理できないよ……」

ファンは正直な感想を述べた。

「少しは私の大変さがわかったの？」

前を向いたままのエレナの声は疲れたように掠れている。

それでも元気を絞り出すように続けた。

「さあ、帰りましょう。今日はうちの宿に泊っていくんでしょ？」

ファンは家と呼べる物は持っていなかった。

両親が死んだ時にファンは既にガリシアの大学に通っていたので、住む者が居ないナバラの生家は処分されていた。今では城に住んで

いるので特に不自由は感じていなかった。

「お客と言つことは……。今日も家の方には泊めてもらえないんだ……」

「あんだ、ムントの話を聞いてなかったの？ 母さんはムントの味方よ？ ファンを家に泊める訳ないじゃない！」

かつとするエレナを落ち着かせるように、穏やかにファンは口を開いた。

「ムントなんか関係ないよ。それより僕は僕のやり方でラリおばさんに認めてもらえるように頑張る。もう暫く時間は掛かるけど、実際に管理局で働けば、おばさんの考え方も変わってくれるだろうし……その時はナバラで働けるように希望も出してみる。それ迄、出来ることは努力する、僕はエレナの側に居たいから」

ファンの少し赤く染まつた顔は前を向いたままだ。

不器用だが精一杯のファンの言葉にエレナの瞳に明るい色が戻ってくる。

たっ、とファンの前に回り込んで悪戯っぽく笑う。

「じゃあ今から家に戻って空き部屋の掃除でもして貰おうかな」

「えっ？ 今から？」

もう日付が変わろうとかいう時間であり、仕事で泊まる客の多いラリの宿に週末の泊まり客は少なくなかった。

「なに言ってるの？ あんだこのままじゃムントに勝てないわよ？

今日と明日くらいはしっかりと働いてもらうわよ！ いいわね？」

覗き込むエレナの顔は、ふんっ、とばかりにことさら拗^すねた顔を見せていた。

「……なんでもないです。うう……、頑張ります」

「うだうだとうるさい！ ちゃんと掃除終わらしたら、ファンの好きなお菓子を作ってあげるから、今日は頑張りなさい！」

ファンを睨むエレナのその目は笑っていた。

ファンはちよつとほつとして、恐る恐るエレナの手を取った。

捕まれた手をエレナはしっかりと握りかえた。

手をつないで静かになった夜の町を歩く二人の足並みは、ぎこちないながらも、しっかりと揃って石畳を踏みしめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5028f/>

『浮かぶ国』 - 認定者の資格 -

2010年10月17日06時42分発行